

ちりょう
治療

3

治療薬「プロミン」の注射が始まるまで、ハンセン病の治療は、大風子油（大風子という木の種からとった油）の注射しかありませんでした。筋肉に注射するのでとても痛い上に、効くかどうかもわかりませんでした。

患者さんは痛い、熱い、冷たい、という感覚がにぶくなるので（知覚麻痺）、けがをしても痛みを感じにくくなってしまいます。そのために、けがに気がつくのが遅れ、傷を悪くすることもありました。

やけどや切り傷などの手当てをする外科場には、治療のためにたくさんのお患者さんが通いました。でもお医者さんや看護師さんの数が少なかったため、患者さんが包帯やガーゼ交換などの治療の手伝いをしました。

包帯やガーゼは洗ってくりかえし使いましたが、その洗濯や、たたむ作業をするのも患者さんでした。



包帯の巻きなおし作業（多磨全生園 大正期～昭和初期）